

大原と文学 千年姫小松

寂光院の庭にある「姫小松」は、「平家物語」で、1185年に寺院に入居した建礼門院が、義理の父である後白河法皇に最後の別れを告げる場所として言及されています。

高倉天皇の妻で、安徳天皇の母である建礼門院は、壇ノ浦の戦いで平氏に敗れた後、寂光院に入寺しました。

彼女は壇ノ浦の戦いで6歳で溺死した息子や平氏一門の菩提を弔って余生を過ごしました。彼女は36歳で亡くなり、彼女の遺体は寺院の敷地内に埋葬されています。

その松は、苔むした庭の中心にある、おたまじゃくしが育つ水辺のほとりに立っていました。

伝説によると、松の木の樹齢は1,000年とも言われていました。しかし、2000年に本堂を焼失した火災の熱により、この松も大きな損傷を受けました。炎と熱による傷みはひどく、切り倒されることとなりました。

松の切り株は、伝統的な「しめ縄」（わらをよって作ったロープ）が幹の周りに巻かれて、保存されています。

切り株から約1メートルのところに、この古木から生まれたと思われる若い松があります。